

(2016年10月9日～20日)

今回は始終好天に恵まれて、前回その6で巡り残した伊予の最後の札所・第65番三角寺、並びにその奥之院である四国別格二十霊場第13番仙龍寺から始めて、讃岐涅槃の道場23札所、第1回巡礼で巡り残した阿波の別格二十霊場の内第15番箸蔵寺、同第20番大瀧寺も打ち終えて、2巡目を結願した。

この別格3霊場は、別格二十霊場の中でも特に離れた山中にあって、何やら由緒ありげな、山岳修験に相応しい行場のようであった。

今回の2週間の道中、全く雨に祟られなかったのは、多少は野宿苦行遍路の功德が顕れてきたのかと思いたい、マ、これは毎晩の夜遍路の居酒屋へのお布施の験が現れたというべきであろう。

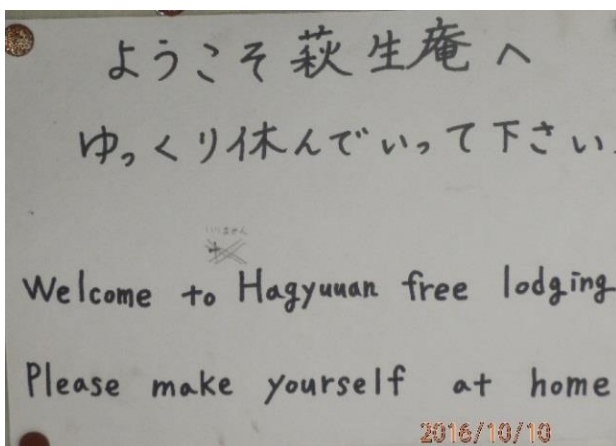
【10月9日 曇り】自宅～愛媛県新居浜市萩生

今回のスタートは、伊予三島から東へ歩2時間ほどの山中にある第65番札所「三角寺」であるから、本来は伊予三島周辺に泊まればそれでよかったのであるが、三島周辺には野宿する場所が無い。JR三島駅から三角寺へ行く道すがらに「戸川公園」という三島市街の夜景と瀬戸内海の眺望、それに桜の名所でもある野宿に適した広い公園があるが、ここの四阿には沢山の野宿遍路が勝手に泊まり込んで治安が悪化したために周辺の住民の反感を買い、“野宿禁止”の大きな看板が出ていているそうなので、ちょっと無理に野宿する訳にはいかない。

伊予三島からJR予讃線で小1時間ほどの所に新居浜市萩生という町があり、この旧道（遍路道）沿いには野宿遍路には人気が高い善根宿「萩生庵」がある。この善根宿は畳店のガレージの片隅に畳3畳ほどを敷いた遍路小屋であるが、この畳屋のお婆さんが名物婆さんで遍路の世話を焼いていてTVなどにもよく登場するお接待婆さんである。1回目もこの遍路小屋で休憩させて貰ったが、一度は泊まりたい善根宿であったので、今回は態々伊予三島を通り越して新居浜の中萩駅まで行き、この萩生庵に泊めて貰った。期待を裏切らない立派な善根宿であった。勿論、無料。



(建物の右端のガレージを遍路小屋に開放)



(清潔な内部)

本日の同宿者は3人。実はもう一人女性遍路がいたのだが、彼女は男性との同宿野宿を遠慮したのか、次の宿に歩を進めて行った。同宿者の一人は、テントなど家財道具一切を積んだ自転車遍路であった。本州を8年間、四国を6年間自転車で行脚しているそうで、その間一回も家に戻ったことがないと言っていた。その大義名分は、災害や事故などで亡くなった人々を慰霊し、また現在も集中豪雨や火山爆発の災害で困っている人々に心の安らぎを与えるための供養の行脚だと言っていた。かつて弘法大師が諸国を行脚された故事に倣っているのかも。会社員をしていたある日、突然仏様の啓示があって即座に会社を辞めてこの道に入ったとも言っていた。

身綺麗な恰好はしていたが、話の内容からすると托鉢遍路（俗には“乞食遍路”、“職業遍路”とも蔑称されている遍路で、お接待によってのみ糊口を資している人々）のようであった。我々が知らないような仏教界の裏の話や、お遍路の裏話も俄か遍路の小生には新鮮なものがあつた。例えば、我々が遍路道を歩いているとその辺の住民の方々から所謂お接待を頂くことが多いが、托鉢修行僧や托鉢遍路に対しては、住民の眼は厳しく、托鉢で門前に立てば今まで開いていた玄関が急に閉まってしまうとか、路傍に托鉢遍路の姿が見えたら急にカーテンが閉められてしまうとか、居留守を使われるとか云々・・・。

托鉢を求められる遍路道沿いの住民からすれば、自宅門前での托鉢行為は迷惑なことであろうから、余程信心深くて親切な人々以外は関わりたくないことは無理もないことであろう。このことは、我々一般の遍路に向けられた地元の人々の一般の方々の裏に隠れた視線にもあるかもしれない。

余談になるが、遍路、特に観光バスなどで来る団体遍路が落とす金は札所の寺と都市部の大資本の観光会社やホテルに入るだけで、地元では遍路民宿や食堂を僅かに潤すに過ぎない。地元の一般の方々にとっては、多数の観光遍路バスや乗用車、歩き遍路が通って地道の交通が輻輳し、また、道端にやたらにゴミを捨てられたり、立小便をされるなど、迷惑千万なことばかりであろう。

札所の寺院には檀家寺も多く、今まで檀家が苦勞して維持してきた寺を“裸足で踏み荒らす”団体遍路も多いし、また、かつてはつつましい檀家寺であつたものが、遍路の落とす納経代などで急に裕福になって、そのため住職が“俗化”して要りもしないベンツで夜な夜な色街に通い、挙句の果てに馴染みになったバーの女を尼にして寺に連れ込むなど、檀家から顰蹙を買っている寺も多いと聞く。ご参考までに、八十八札所に遍路が納める納経料他は1寺当たり年間で約1億円に上るといふ。

一例を挙げれば、阿波の某札所の寺では、徳島のストリップ劇場の東洋人踊り子に入れ込んだ住職がこの女を寺女として連れ込み、果たして夜ノ方面が過ぎたためか住職が頓死してしまい、本山ではこの女を尼に仕立てて住職を継がせたという。このことに檀家は本山に抗議したが、本山では檀家よりも遍路札所などの金儲けを優先して、聞く耳を持たなかったそうだ。こともあろうか、徳島県はこの女を徳島観光大使云々に任命して韓国や中国からの海外観光客の誘致にやっきになっているらしい。

最初の巡礼の折、このような話をさる善根宿で聞いたので、小生も早朝の勤行時に合わせてこの寺に寄って見た。寺の宿坊に泊まっていた数人の遍路を前にこの女住職が説教をしていたが、日本語が話せないのか或いは説教する知識もないのか、この女住職が手に持ったラジカセから男の勤行の声と説教が流れていた。女の顔は暗くてよく見えなかったが、着ている袈裟も金襴緞子で、顔もコケティッシュのように見えた。このような住職の勤行を有り難がっている信者も気の毒であるが、巷説によれば、この寺の宿坊に泊まって朝のお勤めをする遍路は、この女住職即ち元ストリップ嬢の顔と体を見てみたいというソノ道の興味からであるという噂が専らである。

話が横道に逸れたが、上の托鉢遍路の話に戻ろう。この遍路の話が面白かつたし、もっと聞きたかつたのでお接待で近くの居酒屋に誘った。彼は大酒豪のようで伊予の魚を肴に一人で熱燗を1升ほども平らげた。日頃は葷酒のお接待に与ることは滅多にないのであろう。呑み代はこれまでの2回の巡礼で頂いた現金お接待の総額を一桁増やしたほどの金額になったが、日頃はお接待頂いている遍路が逆に他者にお接待するのも結構なことである。多少は地元の方々への恩返しのお布施になったかも。

彼は、萩生庵に帰ってから、もう一人の同宿者と口論になり、どこかの公園に寝ると言って夜中に出て行った。今頃は何处を走っているだろうか。

- 本日の遍路距離 2km（中萩駅～善根宿）
- 本日の宿 善根宿「萩生庵」（無料）
- 本日の夜遍路 割烹小料理「味采 吉おか」1万円

【10月10日 曇り/時々晴れ】新居浜市萩生庵～ 65番三角寺～別格13番仙龍寺～川之江市川滝町領家

本日の遍路のメインイベントは、別格13番の仙龍寺である。四国霊場の縁起を纏めた『四国徧礼霊場記』

（出版は江戸時代）によれば、「三角寺奥之院は金光山仙龍寺と号す。是（三角寺）より路程五十八町山中岩端をとり、崎嶇を歴て至る。大師の像を本尊とし、一の橋二の橋ありて回廊十八間を構ふ。南に仙天堂あり。釈迦ヶ岳には大師御修法の所といひ、岩窟あり。凡此山嶺岩峭嶮として、白雲足下に生じ、一鳥鳴かず。幽邃絶塵ときこゆ」とあって、「三角寺から奥之院の仙龍寺に至る道は岩の端に掴まったり、峻しい所を経て至る道で、（中略）寺は18間の回廊を構えて、南には仙天堂、釈迦ヶ岳には大師が修行した岩窟があり、絶壁の足下には白雲が湧いていて、鳥一羽も鳴かない俗塵から遠ざかった幽邃の地」だそうだ。

黄色本（へんろみち保存協力会発行の現在のガイドブック）のガイド地図で見ても、相当峻しいと思われる点線の遍路道が記載されていて、仙龍寺境内の直ぐ足下には銅山川が深い山溪と湖を作って流れていて、その源流部にはかつては住友財閥の礎となった別子銅山があった。この銅山は日本最大の銅山で江戸時代から昭和時代まで約300年間も銅を産出し続けた。また、この辺りは、四国4県の県境が接している四国山地の山奥で、奥之院仙龍寺は何やら奥ゆかしくて由緒ある辺境の寺であるらしい。

この寺は、元々は65番三角寺の奥之院であったが、三角寺と仲たがいをして、今は「四国総奥之院」、「伊予国奥之院」と称している。前者のフリガナは“いよのおくのいん”と振ってあり、“四国総奥之院”では些かおこがましいので読み方だけは“伊予”と読ませたのであろう。

ご本尊は、普通のお寺には珍しい弘法大師である。四国八十八札所では弘法大師がご本尊の寺院は全く無い。別格二十霊場にはこの仙龍寺を含めて3ヶ寺がある。

（余談であるが、八十八札所の御本尊は薬師如来や観世音菩薩をご本尊とする寺が半数、次に大日如来、釈迦如来が続く。世上よく知られた弥勒菩薩や文殊菩薩は意外に少なく各1寺のみ。珍しい本尊では、観音が馬頭の姿になった馬頭観音や七福神の毘沙門天を本尊とする寺が各1寺となっている）。

この仙龍寺が大師をご本尊としている縁起は、大師がこの地に行脚された時、金剛窟に瀧沢大権現と開運不動尊を勧請して、息災の護摩壇を築き、朝夕「きよめの瀧」で心身を浄め「開運厄除」「虫除五穀豊穰」の二つの御請願を立てて、21日間護摩の修行をされた。その護摩修行成満の後、自らの姿を彫刻して、此の山に留め安置し給うた。それがこの寺のご本尊であり、「厄除大師」「虫除大師」と伝えられて諸国より多くの信者が参籠に来るそうだ。

前置きが些か長くなったが、奥之院派のワタシとしては、これは何が何でも参らねばナラヌ。この寺は、八十八札所の遍路道からは遥かに離れているので、三角寺を打ち終えてこの寺に参り、また元の遍路道に戻るには1日ほど余分な回り道にはなるが、別に急ぐ旅でもない。

さて、黄色本の地図で見ると三角寺の境内からこの奥之院に巡る遍路道が記されているのだが、いくら境内を探してもそのような径は見つからなかった。納経所で聞くと、そのような遍路道は無いので国道319号を歩いて行くしかないという。帰宅後、地理院の2万5千図に当たてみたら、ちゃんとこの遍



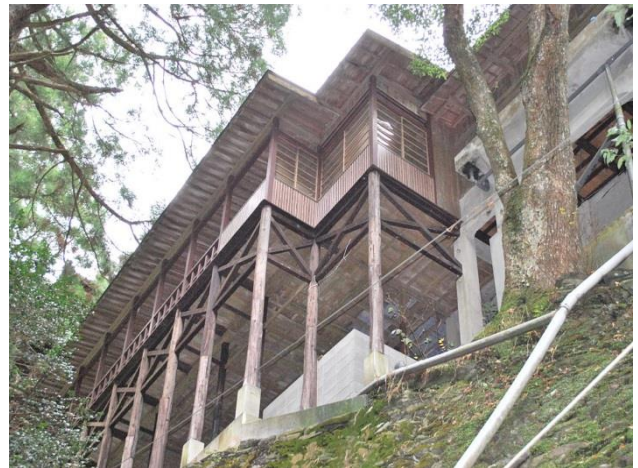
路道と思われる破線が記載されていたので、確かに昔は遍路道があったのであろうが、今は廃道になっているのかも知れない。この山越えの遍路道が奥之院巡りの一つの目的でもあったので、国道を歩くのは気が進まなかったが如何ともしがたい。

ウネウネとしたこの国道は、国道とはいえ車1台も通らず集落も全く無い峠越えの淋しい道路であった。日光のイロハ坂よりも峻しいヘアピンカーブを独り黙々と2時間半歩いたが、これは苦行であった。

しかし、やっと辿り着いた奥之院仙龍寺は期待に背かず奥ゆかしそうな辺境の山寺であった。猫の額のような岩窟の滝の上に橋を渡してその上に由緒ありそうな本堂が回廊建てで建てられていた。この岩窟が大師が21日間護摩を焚いて修行したと伝えられる金剛窟であろう。今でもその護摩供養がこの岩屋で厳かに行われているという。



(猫の額に建てられた仙龍寺の伽藍)



(本堂は回廊建て)



(岩窟で行われる護摩供養)

(←本堂は岩窟の滝の上に建てられている。

この岩窟の滝で大師が修行をしたのであろう)

仙龍寺からは、銅山川沿いの県道を堀切トンネルまで歩いた。この道もウネウネと曲がったアップダウンの山道で、うんざりするほど長かった。堀切トンネルは1.5kmもある長いトンネルで歩道も無かったので危なくて歩けない。1日に3本ほどしかないが、路線バスが通っていたので小1時間ばかり暇を潰してバスでトンネルを越えて、次の札所66番雲辺寺への道、国道192号に戻った。この国道は愛媛県川之江市から県境の峠を越えて徳島県三好市に通じているが、この峠は香川県との県境でもあって、次の札所66番雲辺寺は正確には徳島・香川県境上



の徳島県側にあるのだが、遍路の世界では讃岐の 23 札所はこの雲辺寺を第一番札所として始まるとされている。

今晚の宿は、川之江市から徳島県境を越える手前の善根宿「毛利荘」に泊めて貰った。昔、この辺りの大庄屋だった子孫の方で今は川之江市に居住しておられる方が、大庄屋の跡地が草茫々になってもいけないからとこの土地に小さな遍路小屋を今年の夏に建てられて、歩き遍路の宿に供しておられる。遍路から宿泊のクエストがあった時にだけ川之江から車で鍵を開けに来られるが、夕方には川之江に帰られるので夜は無人となる。2 部屋しかない小さなロッジであるが、風呂、台所、冷蔵庫、チン、洗濯機、エアコン、綺麗な布団なども完備した立派なものだった。新築であったので非常に気持ち良く泊めて頂いた。相客はおらず小生独り。付近にはコンビニも無いようであったので、今晚用に今朝三島で仕入れて担いで来た般若湯と弁当を頂戴した。般若湯は本当はビールを頂きたかったのであるが、遍路歩きではビールは保冷できないので梅酒にした。このことを宿主に話したら、予約する時にビールを買ってきてくれと言えば川之江を出る時に冷たいのを買って持参してあげると仰っていた。ビールを冷やす冷蔵庫もあるので、次回はそうにしよう。

この善根宿は「野宿&一夜宿一覧」というリストから探した。このリストには管理費寸志志納と記載されていたが、今回「お遍路ハウス」という NPO 法人に加盟したのでこの団体の協定価格・素泊まり 2800 円になったとのことだった。それでも、旅館並の施設でこの金額は有り難いものだった。

この NPO 法人には愛媛県内を中心に 10 箇所の遍路宿泊施設が加入しており、そのパンフによれば以下の主旨に賛同した善根宿の有志が作ったのだという。

- ①若者達に安価な遍路宿を提供し、遍路文化を通して人生を見つめて欲しいと願う「心の事業」であること。
- ②女性の独り旅でも安心して泊まれる清潔な宿であること。
- ③この宿に泊まる人は、同宿して人生を考える仲間であって、お客ではない。
- ④外国人と日本の若者が交流できるグローバルな遍路宿であること。

結びのキャッチフレーズには、“世界各地の若者たちが交流できる「お遍路ハウス」は、世界の平和基地です。お遍路道中の寄り道、回り道、迷い道をスローに楽しみましょう！”

なかなかイカス文句ではないか。P. 16 で触れた高知県奈半利の山本美園さん宅も入っている。この値段なら外国人（特に欧亜人）の歩き遍路には貴重な宿となろう。この NPO が出来る前にも、ゲストハウスと呼ばれる外人向けの安宿はあったが数が少なかったので、これは彼等にも朗報であろう。この毛利荘の御主人毛利さんは高校の英語の先生だったそうであり、また上の山本美園さんも英語が堪能なので、この面でも外人遍路には嬉しいのではなかろうか。

興味ある方はこの NPO 法人「お遍路ハウス」のHP、<https://henrohouse.jp/ja> をご覧頂きたい。



(毛利荘がある付近。写真奥が愛媛・徳島・香川県境の峠)



(新築の毛利荘)

●時間節約のために、前夜泊まった新居浜市 JR 中萩駅から
JR 三島駅迄乗車。三島駅から三角寺まではタクシーで飛天。

11:00 三角寺、13:30 仙龍寺、15:10 堀切トンネル（路線バス乗車）、
15:50 平山バス停（下車）、17:00 毛利荘

●本日の遍路距離 55km（内歩＝20km）

【10月11日 晴れ】毛利荘～境目峠～曼荼トンネル～

66 番雲辺寺～67 番大興寺

伊予最後の札所「三角寺」から讃岐最初の札所「雲辺寺」に抜ける峠越えの遍路道は3本ある。旧来の遍路道（今は“四国のみち”に指定されている）、境目トンネルを抜けて国道192号を徳島県池田町に抜ける自動車道、徳島県・香川県境の県境稜線尾根を通っている山岳農道を辿る道の3本。前回国道を通ったので、今回は四国山地や瀬戸内海の眺望が得られるという山岳農道を辿る道を選んだ。

この道は、まずは境目峠という峠から曼陀峠という峠まで愛媛県・徳島県境の林道を登る。それぞれの峠には民家が1、2軒だけあるが、他は何も無い山道であった。国道からその県境の道に登り始める所には右のような遍路石があった。是は相当古い標石のようだった。ここから山道は急坂となって、半時間ほどウンウンと唸ったら上の道路に飛び出した。

飛び出した所に遍路ベンチがあって、疲れた足には丁度良い休憩所となっていた。

そこには下のような張り紙もしてあったので、早速ウチワを1枚頂いた。ウチワには「四国中央市観光協会 2016年夏祭り」と印刷されていた。地元の方々のこのようなお心遣いには心和むものがあり、嬉しいことである。



お遍路さん、暑い中をお疲れ様です。
どうぞ一休みして下さい。
今の坂道は昔から雲辺寺への近道として利用された道ですが、国道にトンネルができてからは今の坂道を登って来られるお遍路さんは少なくなり大変淋しくなりました。そんな中、白衣姿のお遍路さんが見えると心が和みます。ここから0.5kmで県境です。雲辺寺までは12kmくらいです。うちわなども宜しければお持ち下さい。道中、どうかお気をつけて。

境目峠から曼陀峠までは林道が通っていたが、曼陀峠に近づくとも林道には草木が繁茂していて最近人が歩いた形跡はなかった。昨日の山中の道もそうであったが、今日も雲辺寺まで誰一人とも会わなかった。歩き遍路でも最近旧遍路道ではなく、国道などの大きな道路を歩く人が多いようだ。



(境目峠にあった愛媛県⇒徳島県 県境の標石)



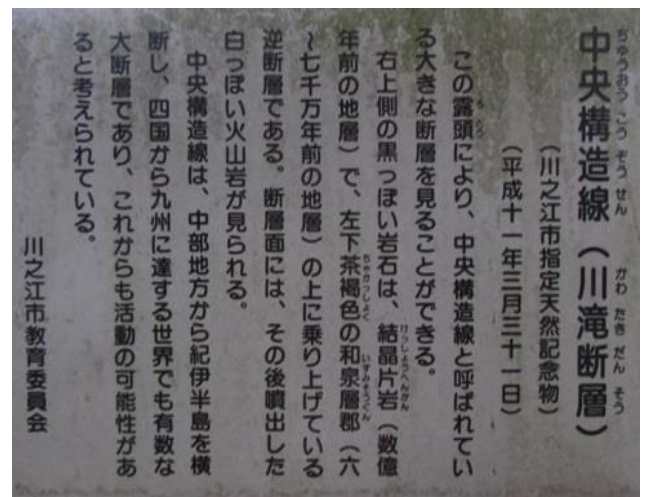
(曼陀峠に近づく、道は草茫々になっていた)

境目峠には右のような石垣があった。この石積みの技法は「谷積み」と言われるもので、力学的にも優れた構造らしい。伊予では各地で見かけたが関東などでは余り見掛けないうで珍しかった。

この辺りは四国に伸びた中央構造線（フォッサマグナ）が通っている地域で、その露頭が地表に顕れている箇所があるのだそう。その露岩の様子からヒントを得てこの谷積みという石垣の技法が生み出されたという。下の写真がこの構造線の露岩であり、その解説を読んでも門外漢にはピンとこないが、昔の人々には現代の我々には想像もできないような能力があったのであろう。露頭の線は、確かに谷積みの“斜め線”に見えれば見えるのかも・・・。



(川滝断層の露頭)



さて、曼陀峠からは徳島・香川県境の稜線尾根を通っている広域農道を歩いた。この辺りは、香川県の高原野菜の特産地で、ビニールハウス団地が沢山あった。また、旧遍路道でもあり、かつて農耕牛の貸借*（次頁註）があった時代には阿波から讃岐へ借りてきた牛を帰す道でもあったそうだ。



農耕牛の貸し借り*（以下、宮本常一著『生きていく民俗～生業の推移～』（河出文庫）から引用しておく）

「牛馬を貸借する風習は各地に見られる。大和地方もまた盛んであった。大和平野は全くの平地で、一面の水田であり、産地も原野もない。従って、牛馬を買うには飼料が十分でないので不便であった。そこで草の多い山中へ預ける風が古くからあった。山中というのは大和平野の東にある丘陵台地の笠置高原である。平野の農家は秋の取り入れと麦田の鋤起こしが済むと山中に預けるのである。山中ではそれから田植え時期まで預かる。そして自分の家の田畑の鋤起こしに使う。春、田を起こし田植えを済ますと、牛を追うて里へ下って持ち主の所へ追っていく。（中略）。

ところが、山中の方の者が牛馬を持っていて平野地方に貸し付ける風習も見られる。これが盛んだったのが、**徳島県と香川県であった**。香川県の讃岐平野は大和平野と同じく、すっかり開き尽くされて、牛馬を飼う余地はいたって少ない。そこで徳島県から牛を借りた。徳島県の吉野川中流地方は山地が広いので、どこの家でも多くの牛を飼っていた。その牛を田植えの始まる前に日を決めて、阿波と讃岐の国境の峠の上まで引いていく。すると香川の方から牛を借りたい人たちが沢山やってきて、峠の上で取引する。話が決まると香川の百姓たちは牛を引いて帰る。仕付けが済んで牛が要らなくなると、牛の借り賃としての米を牛の背中につけて峠の上まで引いていくと、持ち主が来ていて牛と貸し賃を貰っていく（筆者注：この峠が上で触れた曼陀峠）。貸し賃は人夫賃の二倍にあたっていた。すなわち、一日が四升から五升であった。この牛をカリコ牛といっている（同：前ページの案内板にある“借耕牛”）。（中略）。平野の村では牛の借賃の他に、山中では珍しい塩魚などを牛の角に掛けてやることもあり、これをツノミヤゲといったという」。

この曼陀峠から雲辺寺までの道も、ウネウネと曲がりくねった坂道で長かった。雲辺寺の山の天辺がすぐそこに見えてはいるのだが、曼陀峠から2時間半も掛かった。ここでも誰にも会わなかった。既に10月の半ばであったが秋の残暑が厳しく、日陰の無いコンクリート舗装の一本道は灼熱の地獄であった。

雲辺寺は、四国八十八カ所の内で最高標高地点(標高 1000m)にあり、また、愛媛県側からも徳島県側からも辺鄙な山中にあるが、香川県側からは観音寺方面からのロープウェイが境内まで上がっているのも意外に参拝客が多い。団体バス遍路もロープウェイ下駅でバスを降りて、ロープウェイでお寺まで往復しているようだ。

前回は行かなかった寺の奥の毘沙門天展望館に足を延ばしてみた。展望台からは、西には石鎚山の向こうに松山・今治から瀬戸内海の安芸灘や多島海の島々、北には丸亀・坂出・高松から岡山方面、東には徳島平野を流れる吉野川や剣山、南には大歩危・小歩危の祖谷方面が 360 度グルリと見渡せた。八十八カ所随一の眺望と言われる所以であろう。霞んではいたが、四国と本州を結ぶ 3 本の瀬戸内海架橋の内、瀬戸大橋(香川県坂出～岡山県児島)、しまなみ海道(愛媛県今治～広島県尾道)の 2 本が同時に見える場所は、四国広しと言えどもここ雲辺寺山と石鎚山くらいではなかろうか。雲辺寺の御詠歌「はるばると雲のほとりの寺に来て 月日を今は麓にぞ見る」に相応しい大展望であった。

この寺には通夜堂があり泊めて貰うことができる。

“雲のほとりの寺に来て”その幽邃な通夜堂で一晩仙人になってみるのも悪くなく、今回ここに泊まることも考えてみたが、伊予三島からここまでの 2 日行程のどこにもコンビニや酒屋が無いから、般若湯はおろか弁当を調達することもできない。メシは 1 回 2 回飛ばせても、般若湯だけは御大師サマに差し上げねばナラヌ。そのような訳で、今夜は次の札所まで降りて、その辺で野宿場所を探すことにして、この通夜堂籠りは諦めた。ウラメシ気に通夜堂を覗いて見た。綺麗に掃除されていて、気持ち良さそうな通夜堂であった。

さて、次の札所は讃岐の観音寺の郊外にある。標高 1000m の雲辺寺から海岸レベルに近い次の札所までの遍路山道を下るのに 4 時間ほどは掛かる。この分では札所が閉まる夕方 5 時までにはどうも辿り着けないので、チョット飛天ノ術を使った(ロープウェイに乗車)。ロープウェイ下駅では、ちょっとカンビール一杯でも乾いた喉に流し込みたかったが、観光バス団体遍路一行が場所を独占していて、売店に近寄ることさえできなかった。独り歩きの遍路には団体バス遍路は些か迷惑なことではある。

ここから次の札所第 67 番大興寺までの道は、通常の遍路道ではなく蜜柑畑の中の農道を選ったので、遍路標識も何も無く、途中何回か道に迷った挙句、このピッチでは納経時間に間に合いそうになくなったので、夕方の 2 時間程を走るように飛ばしたので途中でくたばってしまい、道端にへたり込んでしまった。案の定納経時間には間に合わなかった。その辺で野宿場所を探してみたが、田圃ばかりで野宿できる場所が見つからず、前回泊まった遍路民宿に泊まることにした。この民宿はオバサン一人でやっているが、なかなかホスピタリティーも良く、洗濯物も綺麗に畳んであった。気持ち良くなって、



(雲辺寺の通夜堂。ドイツ人夫婦が泊まっていた)

ビール大瓶4本もお大師サマに差し上げてしまった。

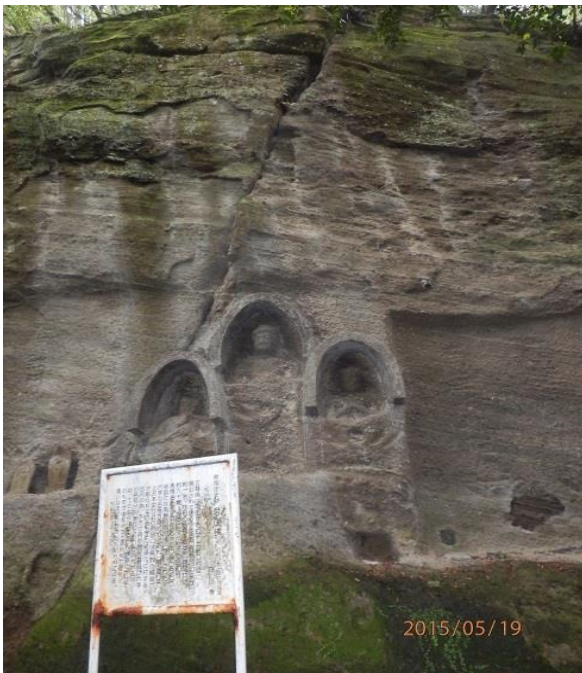
- 7:30 毛利荘発、9:15 七田集落、9:45 境目峠、
11:15～45 曼陀峠、14:00～15:00 雲辺寺、
18:00 大平荘
- 本日の遍路距離 30km (内歩 25km)
- 民宿 おおひら 2食付 6000円 応対も非常に結構



(民宿 おおひら)

**【10月12日 晴れ】67 大興寺～68 神恵院・69 観音寺
～70 本山寺～71 弥谷寺～72 曼荼羅寺～73 出釈迦寺～74 甲山寺**

今日のハイライトは、死霊が集まる山とされる讃岐の弥谷寺である。この山は、太古の昔、政争に敗れて遠島に流されたりして非業の死を遂げて怨霊になったと言われる崇徳院、後鳥羽院、菅原道真や平ノ将門などの大悪魔天狗が、無念の恨みを晴らすために大災厄を引き起こして世を乱す目論みを相談する場所でもあったという。なるほど、この弥谷の谷底は死霊や幽霊や魔物が住むに相応しく、暗くておどろおどろしい場所であり、夜には真っ暗な境内に松籟でも吹き荒べばこれはもう恐怖以外の何物でもなく、気が小さいワタシメなどは御叱呼をチビッテしまうのではなかろうか。



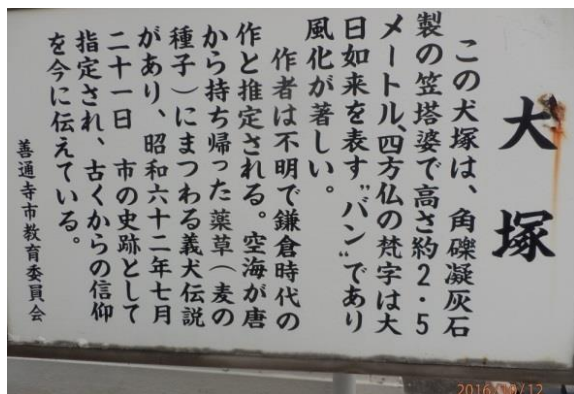
(獅子の窟。怨霊会議はここで開かれた?)

←弥陀三尊 磨崖仏 (ここもちょっと恐ろしい場所)

このような人里離れた辺鄙なお寺に一晩籠って怨霊の恨みを聞いて差し上げるのも、或いは供養のひとつではあるまいか。と、思って「野宿&一夜宿一覧」リストを調べて見たら、この寺には通夜堂があるという。しかし、納経所をお願いしてみたら、かつては山門の上に通夜堂があったが、或る時泊まった遍路の失火によって消失したために、通夜堂はもう何十年も前から廃止になっているとのこと。

納経所の若僧曰く「最近、遍路のHPで探して来たといって、通夜堂に泊めてくれと言われる遍路が多い。他の寺でもそのような話を聞いている。HPの遍路情報は他人のコピー情報が多いから見る人も気を付けて貰いたいし、我々も迷惑している。インターネット社会の弊害だネ」と説教をひとくさり。

マ、それはともかく、今宵はこの弥谷寺の通夜堂に泊めて貰う算段でやってきたので、どこかに泊まれる場所を探さねばならないが、この辺りは深い山中でそのような場所も無い。寺から少し下った所に道の駅の温泉（いやだに温泉）があったが、ここは運悪く本日休業。次の札所が3ツ程連続している善通寺市郊外まで歩を進めるしかないが、歩いて廻れば納経時間に間に合いそうにない。不本意ではあったが、またまたタクシーを使って次の第72番札所「曼荼羅寺」まで飛天した。その隣の73番「出釈迦寺」を廻りその次の74番「甲山寺」に向かったが、この田圃道が結構長かった。何とか納経時間に間に合わせようと急ぎ足で飛ばしたので足がストライキを起こして痙攣したが、甲山寺には閉門ギリギリの15秒前に飛び込むことができた。甲山寺から善通寺の市街地まで疲れた足を引きずってトコトコと歩いた。途中には下のような石碑もあった。



梵字
バン
ン



善通寺では野宿できる遍路小屋や御堂がなく、ツェルトを張れる公園もなかったので駅前のビジネスホテルに泊まった。3日振りの夜遍路は昨年に行った駅前通りの焼鳥屋に行ったが、隅っこの一人用囲み席であったので、店の人や他の客と話す楽しみも得られずただただ黙々と般若湯を呑むというだけに始終して面白味がなかった。同じ独り酒でも、ドイツ文学者池内紀著「今夜もひとり居酒屋」（中公新書）のような雰囲気のレストランにはなかなか行き当たらない。

馴染みが無い土地では、それなりに大衆的で流行っている店を選ぶしかないから、「今夜もひとり居酒屋」のような趣の店にはなかなか行き当たらない。むしろ、前編（その6、P.68）で触れた今治駅前の鄙びた食堂のような店がよろしい。ここ善通寺の駅前にも、破れて汚れた暖簾が掛かっていて人影も見えず、やっているのかいないのか分からないような一膳飯屋風情の店があって、チョット興味を引かれた。今回はここに行ってみよう。



（独りで行くのは興がない駅前通りの焼鳥屋）

●8:30 大興寺、11:30 神恵院・観音寺、12:30 本山寺、15:40 弥谷寺、
16:30 曼荼羅寺・出釈迦寺、17:00 甲山寺、18:00 善通寺駅前

●本日の遍路距離 35km（内歩：30km）

●ビジネスホテル 善通寺ステーションホテル（3500円、良）

●夜遍路 「寅屋」2600円

【10月13日 曇り】75 善通寺～76 金倉寺～77 道隆寺～78 郷照寺（宇多津）

昨日と一昨日は少し強行軍をしたので、本日は朝10時頃までホテルでゆっくりして午前中は善通寺を廻るだけにした。善通寺は弘法大師出生の寺でもあり、また大寺でもあるので、参拝者で賑わってい

た。大師堂には下のような絵が掛かっていた。



道隆寺門前では、昨年も豆地藏の焼き物を頂いた老人に呼び止められて今回も同じような焼き物を頂いた。裏に「洋」の文字が刻んであった。この豆地藏を作っているという息子さんも傍に居られたが、少し知的障害があるように見受けられた。昨年貰った地藏様は自宅の机の上にお祀りしてあるが、今回貰った地藏様もその横に並べて信州安曇野の道端で見かけるような男女道祖神にして祀った。今までのお接待で頂いた千円札は地藏様の蓑に、硬貨は座布団にして差し上げた。



本日の宿は、讃岐・宇多津の郷照寺の近くにある地藏堂に泊めて貰った。県道のすぐ路傍にあり屋根の上を別な県道がオーバーパスで通っているの、車の騒音が一晩中響いたが、清潔で気持ちの良い御堂であった。会社を辞めて四国をテントで歩いているという若者遍路と、この近くの造船所で働いているという中年の男と一緒にになった。中年の男はこの御堂を棲家になっているらしく、翌夜もここに泊まりに来た。



(手前の白い御堂が地藏堂)



(地藏菩薩御真言を唱えながらこのベンチに寝たが、ちょっと狭くて転げ落ちそうになった。地藏菩薩御真言
オン カカカビ サンマエイ ソワカ)



(本日の夜遍路。素朴ではあったが、なかなか結構)

夜遍路は、向かいにあった居酒屋に行った。女二人でやっているローカルな店であったが、まあまあそれなりによろしかった。

●10:00 善通寺、12:00 金倉寺、14:00 道隆寺、16:30 郷照寺

●本日の遍路距離 15km

善通寺市内にあった遍路石⇒

●本日の夜遍路 居酒屋 Dining 4300 円

せんつうじ (善通寺)、
こんさうじ (金倉寺)、
こんひら (金毘羅)
相当な年代物か?

【10月14日 晴れ/曇り】宇多津～別格15番「箸蔵寺」往復

箸蔵寺も八十八カ所からは大きく外れた山中にある。場所で言えば、JR 土讃線で讃岐から阿波に入った吉野川上流の徳島県阿波池田の山中の標高 500m の山の中。今いる瀬戸内海沿いの讃岐宇多津からはとても歩ける距離ではなく、JR で往復した。登山口の駅は土讃線の「箸蔵駅」という無人駅で、この駅に停まる列

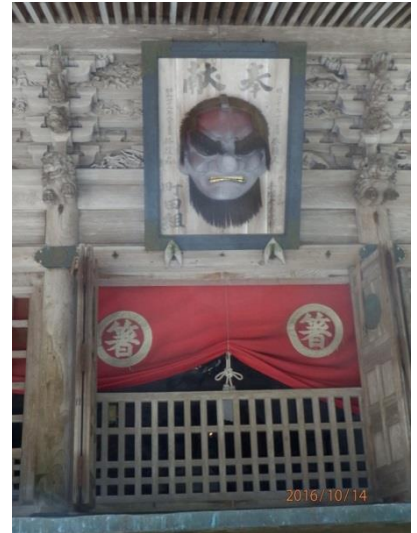


車は日に数本もない。駅から箸蔵寺までの標高差は 500m ほどあり、一方水平直線距離にすれば 1000m 程しかないので、登りの勾配は相当なものとなる。それゆえ、お寺までロープウェイが通じている。今日は謂わば“遠足”であるから、ここでもロープウェイを使って飛天させて頂いた。

箸蔵寺は、金毘羅奥の院として金毘羅信仰の中心をなし、寺域広大、諸堂荘重の名刹。



(本堂にはこのような額も掛かっていた)



(本堂)



(本堂から南に四国山地を望む)

宇多津に帰ってきてから、近くの「瀬戸大橋 四国健康村」という薬湯に行った。漢方薬湯「励明薬湯」というのが売り物で、大衆演劇の小屋もあった。今時、このような大衆演劇の巡演が未だ生きていたのだ。お遍路さん特割「2食付オールナイトプラン 3000 円」というのもあった。入浴料：2 時間 700 円ナリ。



御堂泊まりでは夜間はかなり冷えるようになり、半袖Tシャツしか持って来なかったので風邪を引いた。宇多津にユニクロがあったので長袖シャツを買った。

今宵もまた向かいの居酒屋 Dining に夜廻路に行った。讃岐や伊予は今が秋祭りのシーズンで、東予や西讃では神社の太鼓台という山車が練り歩く。これに合わせて獅子舞などが夜の巷に現れて人が集まる飲食店などで門付をする風習があるらしい。獅子舞は若者2人で舞う。この居酒屋にも現れて15分くらい舞っていった。獅子の口にはタンマリとお布施を挟んでおいた。

太鼓台の山車というのは、今回実物を見る機会がなかったが、ここで泊まった地蔵堂の周囲にもP.85の写真のような祭りの幟が立てられていて、宇夫階太鼓台と染め抜かれていた。また、すぐ傍の道路下の空き地には太鼓台が準備されていてブルーシートが掛けられていた。「宇夫階」というのは、この在にある神社である。太鼓台は町を練り歩き、神社に奉納されるのだそうだ。山車は非常に動きが激しいので、毎年死者や怪我人が出るらしい。



(ブルーシートが掛けられて出番を待つ太鼓台)



(太鼓台 関係 HP から引用)

居酒屋 Dining の近くに、「焼鳥やすい」というネオンが見えたので、『安い?』に引かれて帰りに寄ってみた。お一人様は壁に向かって独りで飲むスタイルになっていて面白くなかったので、ナマ一杯で帰った。「やすい」は「安井」のことかも・・・。

●居酒屋 Dining：4280 円 焼鳥やすい：850 円

**【10月15日 晴れ】宇多津～79 高照院～80 国分寺
～鬼無～83 一宮寺～鬼無**



第 79 番札所高照院は、保元ノ乱に敗れた崇徳上皇が讃岐に配流され深い恨みを残して死んだ地で、崇徳上皇は怨霊となって世の人心を畏れさせた。その怨霊の鎮魂のために、後の二条天皇はこの寺を天

皇寺と改め、同じ境内に崇徳上皇白峰宮を建立した。山号は金華山、院号は高照院、寺号が天皇寺である。崩御した崇徳上皇は、この付近に湧いている冷たい湧水に1ヶ月間漬けられて腐敗を防ぎ、都からの首実検役人を待ったという。

この泉を「^{やそ}八十場の水」と言い、霊験あらたかな霊泉として崇められているそうだが、その泉は今はチョロチョロとしか流れていない泥池の如くになっていた。傍に八十場名物トコロテンという茶店があり、この故事を売り物にしているが、この濁った水を見ているととても喰う気にはなれなかった。

今はこの辺は開けた里地になっているが、裏山は鬱蒼とした森のままで、気のせいか陰鬱であった。吹く松籟は怨霊となった崇徳上皇の阿鼻叫喚でもあろうか。

さて、坂出市から高松市に入った最初の札所は80番国分寺である。丁度昼飯になったので、門前にたった一軒だけある食堂（セルフ饅頭屋「三嶋うどん」）に入ってロング缶ビール2本で喉を潤した。ここからは秋の最中といのに灼熱地獄と化した国道のアスファルトを高松郊外の鬼無という所まで歩いた。

黄色本によればここには遍路休憩所があり、さる遍路のHPにその写真が載っていて非常に綺麗で心地よさそうであったので、今宵はそこに一宿の恩義に与る算段であった。しかし、分かりにくい道をやっと探し当てて行くと、誠にガッカリ、18時閉室となっていた。夜間は施錠されるらしい。個人が自宅の敷地内に作られた立派な新築別邸を遍路休憩所として提供されているようだった。奇々な人も居るものだ。



(高照院・八十場の水 右はトコロテンの茶店)



(「お遍路さん ご自由に休憩をして下さい」)



(綺麗な内部)

他の野宿場所を物色したところ、これぞという御堂などは見当たらず、JRの駅（鬼無駅）があったのでここをステーションホテルにして通夜堂に使わせて貰いたかったのであるが、駅員が居る駅だったのでその勇気が出なかった。駅前に一軒だけあった木賃宿に泊まった。この辺には宴会などをする居酒屋も無いのであろう、この木賃宿の大広間ではどこかの土建団体らしい宴会が開かれていた。

余談であるが、国分から鬼無への途中の県道沿いに右のような看板があった。“セルフの居酒屋”とはいったいどのようなシステムになっている呑み屋であろうか。些か興味が湧いたが、残念ながら日中なので閉まっていた。ジャ〜ンネン。

- 7:00 宇多津地藏堂（途中コンビニにて朝食）、9:30 高照院、
- 11:30 国分寺（うどん屋昼食）、14:00 鬼無、
- 16:30 一宮寺、一宮寺からコトデン、JR 乗継で鬼無駅着 18:10
- 本日の遍路距離 歩：25km
- 宿 鬼無駅前「百百屋」旅館 2食付 6200円
（値段どうり、マアマア）



【10月16日 曇り】鬼無～国分～81 白峯寺～82 根香寺 ～JR 鬼無駅～JR 高松駅

鬼無から国分まで戻り、まずは白峯寺に登った。標高差 400m のキツイ登りであった。途中で猫を抱いた若いカップルの遍路に会った。この猫は 8kg もある猫で、遍路荷物の中では一番重い荷物であるそうだ。この猫はひょっとして弘法大師の生まれ変わりではなかろうか。

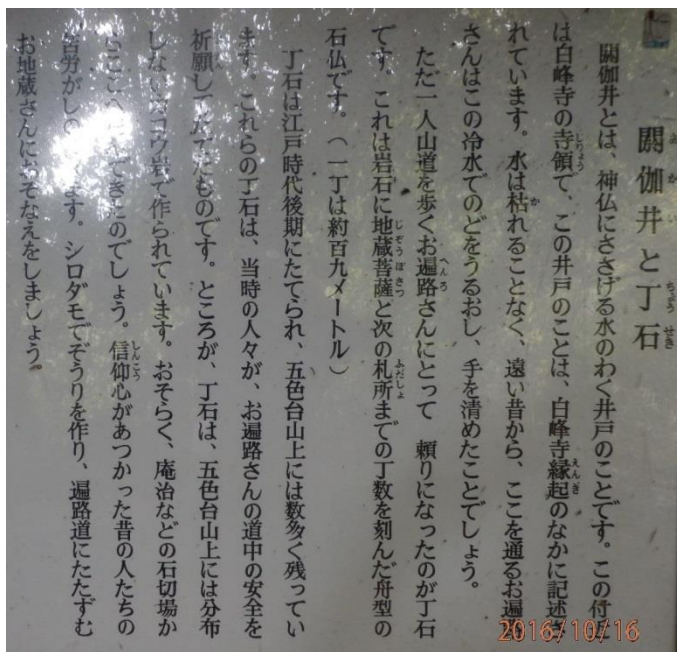
大きなザックを担いだ男の方は手押し車も押していたので、野宿で廻っている遍路であろうが、どのようなイキサツがあってこのような姿で巡っているのであろうか。身なりからは職業遍路には見えなかった。休業中の僧と尼でもあろうか。

白峯寺から次の札所である 82 番「根香寺」への遍路道はなかなか風情がある古道である。大昔から、世を捨てた托鉢遍路、在所を追い出された乞食遍路やカッタイ遍路（レプラ患者）などが身を隠して通った道でもあろう。随所に丁石の地藏様が祀られていて、往時の遍路の有様が偲ばれた。



関加井と
丁石の
地藏様





(峠の茶屋「みち草」)

この遍路道が、五台山スカイラインに出た所に足尾大明神が祀られており、その傍に峠の茶屋があった。オカアサンが一人でやっている「みち草」という食堂である。遍路も何人か入っていた。昼飯を兼ねて〇ビを2本とうどんを頂いた。この近くの五色台には、近くにある禅道場の禅師がロッジ風の遍路小屋を提供されていて、二階に泊まることできる。この禅師は障害児施設の理事長でもあり、障害児にも遍路やお接待を体験してほしいとの願いから「五色台こどもおもてなし処」と名付けられている。民家も全く無い山中であり、この辺りには遍路宿などは全く無いので、この遍路小屋は人気が高く、泊まる遍路も多いようだ。今回行ってみたら、女性専用の遍路小屋も新しく建築されていた。

上の峠の茶屋で般若湯でも買い込んで、山中のこの遍路小屋で御大師様と一献傾けつつ夜籠りするのも、これまた良い供養になるのではあるまいか。御大師サマと每晚同宿二人ではチョット肩が凝るので、或いは偶には、観世音菩薩サマや弁財天サマと同衾二人でおネンネの方がよいかも・・・。次回は是非そのようにしてみたい。



(五色台遍路小屋「こどもおもてなし処」)



(同 新たに作られた女性専用遍路小屋)

何日前にたまたま駅で見たポスターの中に、「国立民族学博物館コレクション特別展・・・香川県立ミュージアム」というのがあった。国立民族学博物館というのは、大阪の千里万博跡地に作られた博物館で、京大系の民族学者による民族研究の成果や民族モチーフ・コレクションなどが展示されている。その方面に興味がある人々には堪えられない展示施設で私も何回か観に行った。千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館と並んで東西の双璧であろう。これは良い機会だ。明日は月曜日で休館であるから、

今日の内に是非見ておかなければナラヌ。博物館の場所は高松駅近くなので、今から近くにある次の札所 82 番根香寺を廻って急いで山を降りて JR を利用すれば、何とか博物館が開いている時刻までに間に合うだろうと急な山道を必死に 2 時間ほど走り下って、鬼無駅から発車寸前の電車で飛び乗った。お蔭様で何とか間に合ったが、足がストライキを起こす寸前であった。

この展覧会は、最近人気が高い「瀬戸内トリエンナーレ(国際芸術祭)2016」のひとつだそう。嬉しいことに、65 歳以上は観覧料はタダ。

伝統的な民族モチーフ以外にも、近年作成された新しい感覚のモチーフも面白かった。下段の旅客機やライオンは棺桶であるが、伝統的な仮面やトーテムポールのイメージに通底するものがありそうだ。



(旅客機とライオンはガーナ共和国)

- 7:00 国分発、8:45 一本松（五色台スカイライン出合）、10:00 白峯寺、11:45～12:45 峠の茶屋昼食（みち草）、13:30 根香寺、15:20 鬼無駅、15:30 高松駅。
- 本日の遍路距離 26km(内歩 20km)
- 宿泊 高松ステーションホテル（朝食付 3980 円、部屋は狭いが清潔で良、洗濯機・乾燥機無料、朝食も good)
- 本日の夜遍路 高松駅前 居酒屋「納屋の炭」
(2818 円、〇ビ 3 杯とも。ホテルのパンフ持参で
〇ビ 1 本無料)



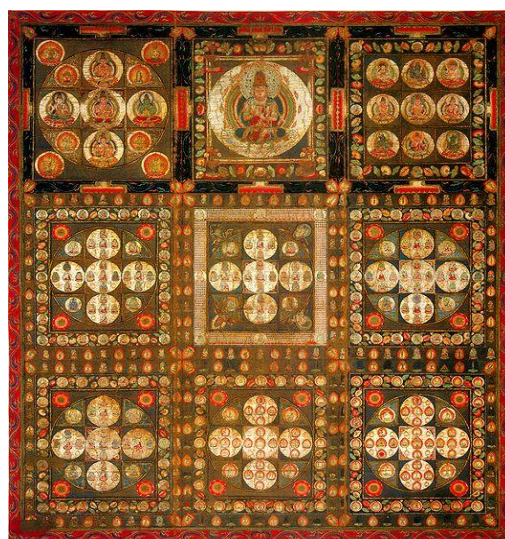
【10月17日 雨⇒曇り】高松～84 屋島寺～85 八栗寺～志度市街

屋島寺からは、昨夜からの雨でツルツルに滑る急坂の石畳遍路道を壇ノ浦に降りた。足が滑って骨折しそうなくらい怖かった。本日のハイライトは八栗寺の奥之院である五剣山の縦走であったから、その時間を稼ぎ出すために八栗ケーブルカーを使って飛天した。八栗寺は、平坦な屋島台地に建っている屋島寺と違い、険峻な五剣山の断崖にある。この寺はかつては山伏の修業地で、彼らは五剣山を金剛界として回峰し、またこの半島が瀬戸内海に突きだしている岬の突端まで走って、そこの海食洞に祀られた竹居観音（ここも八栗寺の奥之院）を胎蔵界として潮垢離をとり、再び五剣山に戻って山と海を往復する^へ辺路修行をしていたのであろう。

余談であるが、四国の^へ辺路修行の特徴は山の金剛界と海の胎蔵界を往き来する修行（行道）になっていて、そのために八十八か所の霊場はその殆どの寺が海岸沿いにある。密教の説くところによれば、仏の世界は金剛界と胎蔵界という2つの世界から成り立っていて、前者は智慧を司り一切の煩惱を碎破する世界、後者は人の仏性を育てて仏とする理法の世界だそう。因って立つ経典は、それぞれ金剛頂經、大日經とされている。凡人には何が何だかサッパリ分からない話ではあるが、マ、この世界はそのようなモノであろう。下にそれぞれの曼荼羅を示しておく。ジ〜ッと眺めていると修行ができた人は分かった気になってくるそうであるが、ハテ皆さんは如何であろうか。

(左) 金剛界
曼荼羅

(右) 胎蔵界
曼荼羅



さて、ちょっと道草を喰ったが、遍路に戻ろう。前回の巡礼では、奥之院は竹居観音を廻った。かつては、この寺の境内から五剣山を越えて直接竹居観音に行く行道があったそうだが、今は五剣山の崩壊が激しく立ち入り禁止になっていたの、仕方なく一旦下界に降りて一般道で廻った。

今回の奥之院巡礼では五剣山回峰を企てた。この五剣山は標高は僅か 400m 足らずであるが、名前のおとおり 5 本の剣が屹立したような独立峰の岩山であるので里のどこからでも見え、山歩きの人には人気が高い山らしい。ただ、八栗寺境内から登る道は崩壊が激しいために「立ち入り禁止」となっていた。



(屋島から五剣山を望む。八栗寺は中腹の豆粒程の白い点、左の削られた山は庵治石の採掘場、中央の入江は源平合戦の古戦場・壇ノ浦、右奥の海岸がこれから廻る志度の町、左最奥の霞んだ山々は小豆島)

この五剣山は、学生の頃から登って見たかった山だったので、今回の讃岐行脚のハイライトの一つとした。立ち入り禁止の山に入るのをお寺の人に気付かれないように、そっと本堂脇をすり抜けて山中に入った。途中には中将坊堂という天狗を祀ってある御堂があり、その辺りからは鬱蒼として森閑とした樹林帯となって、お化けが出そうな雰囲気となった。径も獣道程度となり段々と心細くなってきた。



(八栗寺境内と五剣山、右は中将坊堂の扁額)

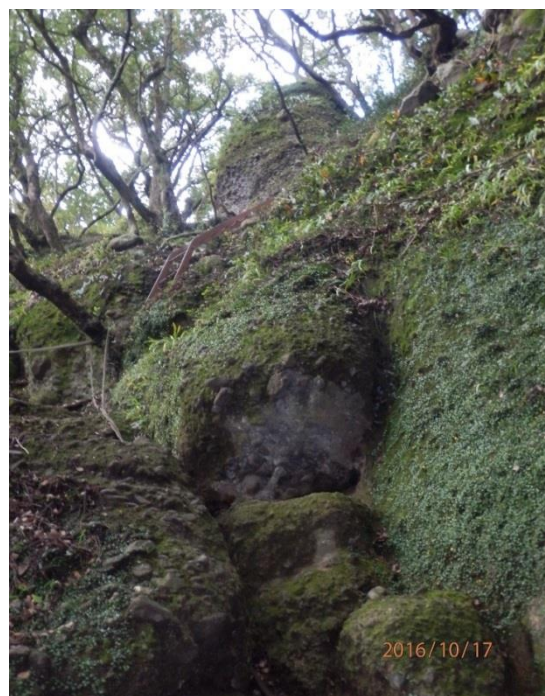


滑り易い落ち葉を踏んでズンズンと登って行くと、かつての修験の道らしく諸処の断崖の岩穴に不動明王などが祀っており、周りの景色とも相俟って陰鬱な様相になってきた。怖くて御叱呼を漏らしそう。

やがて腐ったロープや梯子が現れた。これに掴まって何とか登ると、そこが P-? の頂上らしく小さな祠が祀ってあった。そこから馬の背を進むと、何番目かの剣と次の剣の間のコルに出た。ここは左右がきっぱりと切れ落ちて荒れた足の置き所も無い様なトラバースであった。足下の断崖の垂壁の遥か下には八栗寺の伽藍が見えて、足が竦んで本当に御叱呼をチビッてしまった。日本山岳協会公認の山岳上級指導員のワタシメとしては大変に不本意ではあったが、「無謀！ 老遍路、入山禁止の五剣山で墜落死」という新聞記事が頭をよぎったので、ここでリタイアして引き返したが、帰路は今にも腐って切れそうなフィックスロープに恐々とぶら下がったり、獣道に迷い込んで断崖絶壁から墜ちそうになったりして生きた気がしなかった。這う這うの体で境内に戻った時は、心ノ臓が破裂する寸前であった。



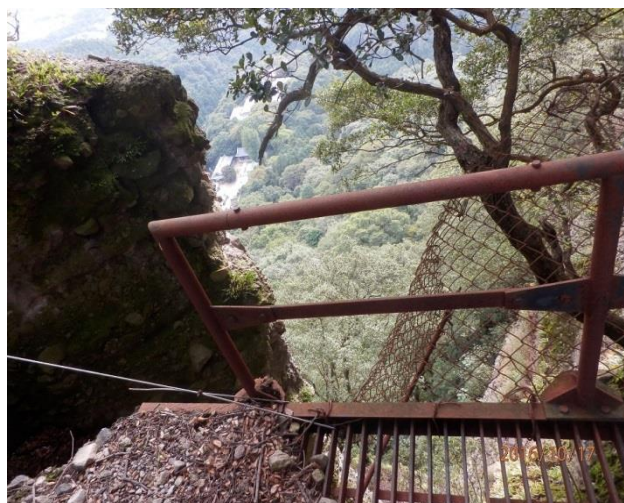
(岩窟に祀られた不動明王)



(腐ったロープと鉄梯子)



(P-?の頂上に祀られていた小祠)



(足下がスッポリ、足が竦んだ。左上奥に伽藍が見える)

怖い思いはしたが、五剣山の山頂からの讃岐平野の眺めは、この恐怖を補うに充分であった。



(五剣山から讃岐平野の眺望。右の台地が屋島、その左が高松市街、中央遠方の山並は四国山地、
右遠方に霞んでいる山は昨日越えてきた白峯寺がある白峯山)

今日は五剣山の山歩きで草臥れてしまって野宿場所を探す元気も無くなったので、志度の旅館に泊まった。昔からの由緒ある旅館だそうだが、立派な朝食付きで安価、しかも新築という別館の綺麗なツインルームに泊めて頂いた。ご主人も非常に親切な方であった。

●本日の遍路距離 21km

●宿 志度「た^いや旅館」(朝食付き 3500 円、素泊まり 3000 円、夕食付はなし)

●本日の夜遍路 寿司「富士屋」(3150 円)、ラーメン「ちどり」(ビール大 2 本とも 1500 円)



【10月18日 曇り】86 志度寺～庵治「イサム ノグチ庭園美術館」～87 長尾寺～前山ダム手前

昨日廻った五剣山の麓・庵治には、20 世紀を代表する彫刻家イサムノグチの美術館がある。イサムノグチは彫刻に使う石を求めて行脚している時に、縁もゆかりも無いこの土地に産する庵治石にたまたま惚れてアトリエを建てて住み付き、以降 20 年に亘って本拠のニューヨークを往き来しながらここで石の彫刻に励んだ。そのアトリエと作品が「イサムノグチ庭園美術館」として公開されている。

この美術館は、週 3 日しか開館しておらず、また見学は事前に予約しなければならず、今回はそれを知らなかったために門前まで行ったのに入れず残念だったので、今回は是非にと思って昨日予約しておいたのである。見学は約 1 時間のガイドツアーとなっていた。見学コースや庭園には石庭のような箒の

掃き目が綺麗につけてあった。前のツアーが終わって次のツアーが始まるまでに、毎回掃き清めるのだそうだ。入場料は 2160 円と少々高かったが、これだけの施設を維持運営し、またガイドを付けてのツアー見学ともなれば、これだけのお布施をお供えしても御利益が充分に戻るというものである。

「イサムノグチ庭園美術館」
入口
後方の山が五剣山（八栗山）



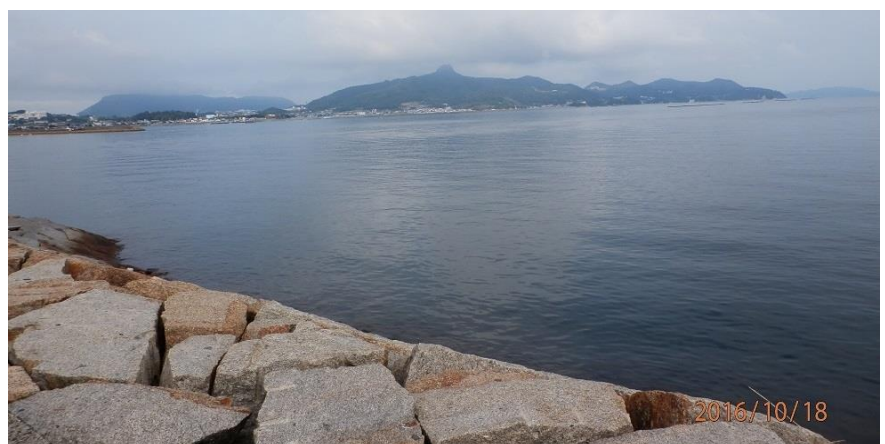
（庭園美術館内部）

（彫刻家 イサム ノグチ）

※本美術館は撮影禁止の為、本頁の画像は関係HPより引用



さて、本日は今まで歩いて来た讃岐の瀬戸内海沿いを離れて、いよいよ最後の札所「88 番大窪寺」がある讃岐・阿波県境の山中に向かうことになる。志度からは志度湾の対岸に昨日通ってきた屋島や五剣山がよく見えた。



志度からは次の札所 87 番「長尾寺」を打ち、いよいよ結願寺の 88 番大窪寺の登り口へ向かった。今晚は、この登り口の手前にある「高地蔵」という地蔵堂に泊まる予定であった。ここは野宿遍路の公認の野宿堂になっていて、許可を得る必要も無く、野宿遍路の間ではよく知られた御堂であるらしい。

しかし、辿り着いてみると、何やら恐ろしい佇まいの御堂で、3 畳ほどの広さの堂内は畳が腐って湿って埃だらけで、百足やマムシなども出そうな感じであった。おまけに、黄色本に記載されていたコンビニはかなり先でちょっと食料（&般若湯）を買い出しに行くという訳にも行かないようであった。

どこかにも書いたが、マ、メシは 1 食 2 食抜かすことはできても、御大師サマに差し上げる般若湯を欠かす訳にはまいらヌ。

そうだ！ここから 30 分くらい戻った所に別な御堂があったナ。そこから更に 10 分くらい戻った所には確か鉄板焼屋もあったような記憶もある。多少出戻りにはなるが、その御堂に泊めて貰えれば、鉄板焼屋で御大師サマにも一献差し上げることができるのではないか。



（今回は泊まるのを遠慮した「高地蔵」。室内はチョット怖そうな雰囲気）

という次第で、前の御堂まで戻っが、この御堂を管理されている人の在所が分からず、あちこち聞き廻ってやっと分かった。少し離れた所の養鶏農家であった。御主人夫婦は「遠方から遍路ご苦労様です。水道も電気もありますが、どうぞごゆっくりお泊り下さい」と親切であった。

この御堂は何を祀っている御堂なのか分からなかったが、仏像は三体あって、真ん中の仏像は怖い不動明王のようであったので、不動明王のご真言を恭しく奉って旅装を解かせて頂いた。「 のうまくさんまんだ ばざらだん せんた まかろしゃだ そわたや うんたらた かんまん」。

この辺りは田圃があるばかりの農業集落で、食堂はおろか、居酒屋なども全く無い場所であったが、幸いなことに 10 分ばかり戻った所に鉄板焼の店がオープンしていた。これ幸いと、今晚はここに夜遍路に行った。客は地元の人ばかりであった。生ビ 4 杯とも 3280 円ナリ。鉄板焼はホルモンを頼んだが、お接待で卵焼や野菜焼もサービスしてくれた。気さくな夫婦がやっている店であった。隣に座って独りで飲んでいたオジサンと遍路の話が弾んだ。



今回の遍路も、残すところ八十八札所の最後の第88番大窪寺と、同じく別格二十霊場の最後の第20番大窪寺だけとなった。大窪寺への道は、今回は緩やかな道路である旧遍路道を通ったが、今回は山越えの急坂である女体山越えの山道を選んだ。このコースは険しい山道ではあるが、標高800mの女体山からの眺望に優れ、また大窪寺奥之院である「胎蔵ノ峰」にも立ち寄れるコースである。マ、“女体山”というのにも興味を引かれるではないか。

登山口の道の駅「ながお」に併設されている「おへんろ交流サロン」でお茶の接待を頂いた。ここでは、歩きで八十八ヶ所を巡り終えた（正確に言えば、未だ最後の結願寺・大窪寺が残っているが）遍路には

「遍路八十八ヶ所完歩証&遍路大使任命書」なる書付と「同行二人」の遍路バッジ、及び「八十八ヶ所遍路スライドショー」なるDVDを配布している。係の人の話では、最近は歩き遍路の数が増えてきて、バッジやDVD作成の経費も馬鹿にならないという話だった。小生は前回に頂いた

ので今回は書き付けだけを頂いた。
この交流サロンには右のような山頭火の句碑も展示されていた。
「陽を吸ふ」という文句と下部に彫られた山頭火の影絵がイカスではないか。



さて、遍路道中物故者供養塔などを眺めて往古の辺路^{へど}修行者に思いを馳せながら、女体山への急坂の山道をウンウン言いながら登って行った。八十八ヶ所の遍路道には、所謂「遍路ころばし」と呼ばれる険しい山道が随所にあるが、その中でもこの女体山への山道が一番峻険のように思われた。



（女体山への険しい山道）

この険しい山道を登りつめて讃岐山脈の稜線に出た所が女体山の山頂であった。天気が良ければ讃岐平野から備讃瀬戸が一望だそうであるが、残念ながら今日は霧が一面に掛かっていて何も見えなかった。助平根性を起こして、キョロキョロと女体の特徴があるモノは無いかとウロウロと探してみたが、その

ようなモノは見当たらず、小祠と般若心経が彩色で彫り込まれた木碑が鎮座ましましていた。この山は遠く讃岐平野辺りから眺めると女性が仰臥している姿に見え、山頂はその乳房に当たるそうだ。一見したところゴツゴツとした岩山なのでそのようには見えないが、3年前に行った米国ロッキー山脈のグランド・ティトン峰も全くの岩山でありながら同様な命名（Grand Teton=large breast）であるから、人類の思考方法は世界のどこに行っても似たようなものであろう。ヘンなことを詮索すると神仏の罰があたるから、それよりも般若心経でも拝んでいた方がよかろう。

女体山山頂
標柱の頭の“四”
のマークは「四国の
みち」のマーク

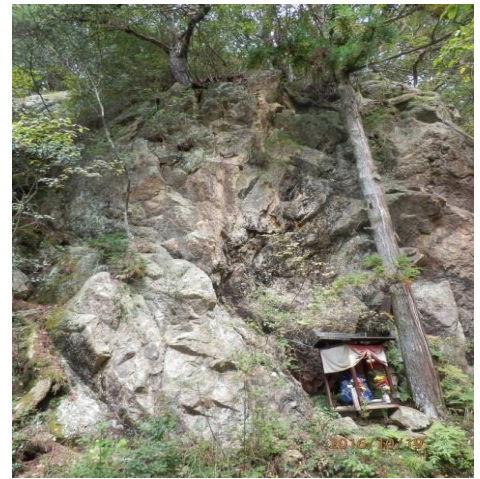


（女体山山頂に安置されていた般若心経。彫られている仏像は千手観音菩薩か？）

女体山から最後の札所第 88 番大窪寺へは、これまた急な階段状の山坂を標高差 400m ほど降るので、足が笑いを越えて泣いてしまった。途中に大窪寺の奥之院「胎蔵ノ峰」があった。この奥之院は谷底にあったので、ここが海に繋がっている胎蔵界の行道（修行場）だとすると、山に繋がっている金剛界の行道が女体山ということになるのか。



(大窪寺本堂、後ろの山が女体山)



(大窪寺奥之院・胎蔵ノ峰)

大窪寺を打ち終えて今回の1年余に及んだ第2回目八十八ヶ所遍路行脚を歩き終えたが、前回と同様「結願^{けちがん}」という感慨はなかった。マ、ワタシメのそもそもの遍路行脚の発心が信仰心でも懺悔でもなく、単なる歩き旅、多少の理屈をつければ遍路巡礼文化の民俗史的探勝という程度のモノでしかないから、マ、こんなモノであろう。

残るは、別格二十霊場の最後の札所・第20番大瀧寺であるが、ここから直接行くには讃岐山脈の山中を15Kmほど辿らなくてはならず、今の時期は途中の遍路道が草木繁茂していて通行できないので、一旦迂回して麓の高松市郊外の塩江温泉郷というところまで下って、明日そこから往復することにした。

大窪寺からは途中の中山という徳島・香川県境の集落までさぬき市営のコミュニティーバスに乗り、そこから塩江温泉郷まで国道139号を8kmほど歩いたが、この139号線は讃岐平野と徳島県の吉野川中流域を結ぶ幹線道路で大型トラックが輻輳し、しかも山中のウネウネした歩道がない狭い道路であったから、トラックに吹き飛ばされて轢かれそうになったりして生きた気がしなかった。

今日は温泉街の安宿を探して泊まった。旅館兼食堂の宿であったが、最近は旅館業の方は開店休業のような状態になっているらしい。ここ塩江温泉というのは、1300年前に名僧行基により発見され、その後、空海(弘法大師)が修業をして湯治を万人に勧めた歴史ある名湯で、高松の奥座敷とも言われているそうだが、ご多分に漏れず大資本の大型ホテルなどに攻められて由緒ある旅館なども今は閑古鳥が鳴いているらしい。中心街から少し離れた旅館や民宿は廃業に追い込まれている所が多いようだ。

旅館から浴衣姿で「行基の湯」という町営の温泉に入ってみた。なかなか結構な湯であった。

泊まった旅館は食堂もやっていて、大衆的で古典的な風情があるいい店であった。ショーケースに魚の煮付けや卵焼きなどのおかず、バラ寿司などが並べられているのも今時珍しい。食事に来る客はトラックの運転手や建設労働者が多いようだ。



(泊まった赤松旅館)



(同 食堂と、きさくなご主人)

●7:00 昨夜泊まった御堂発、8:30 おへんろ
交流サロン発、12:00 女体山、12:40 奥之
院「胎蔵ノ峰」、13:10～14:10 大窪寺、
コミュニティーバスで中山集落へ15分、
14:20 中山発、16:30 塩江温泉郷着

●本日の遍路距離 25km

●赤松旅館 素泊まり 3500 円

食事（同食堂）○ビ大4本、オカズ、
朝食用オニギリとも 4000 円。

部屋も食堂も古くて汚かったが、雰囲気
や対応はなかなか良かった。

宿泊は小生1人、夜の食堂は他に1組3人
のみでのんびりしてよろし。

●行基の湯 入浴料 60 歳以上 360 円



（塩江温泉「行基の湯」）

【10月20日 晴れ】塩江～別格第20番大瀧寺～塩江～高松～岡山

大瀧寺は讃岐山脈稜線上の香川・徳島県境から
僅かに徳島県側に入った大滝山（標高 946m）山頂
にある。塩江からはウネウネと曲がった谷底の県
道を登る。途中に集落や民家は殆ど無かった。
やがて道は谷底から尾根へと登って行って見晴ら
しが利くようになってきたが、右のような山また
山の連続であった。

一般的に別格二十霊場の遍路道には、八十八ヶ
所の遍路道と違って遍路標識などは殆ど無い。

この辺りには人家も無く人も全く居ないので、道を聞くこともできない。このような深い山中で一歩道
を間違えば、里に逃げることもできなくなり、山中を彷徨してやがて夜になれば天狗サマに攫われて地
獄に連れて行かれるであろう。段々と不安になってきた。マ、迷っていても始まらないのでズンズンと
登っていくと、やがて道路工事の現場に出て、そこで道を聞くことができた。

工事のオジサン「ホホウ、神奈川県から来なさったか。神奈川県はどこから来なさったかネ？」

ワタシ「江の島の近くでゴイスよ。横浜と小田原の真ん中辺りでガンス」

オ「何だい？ そのゴイスとかガンスとかいうのは？」

ワ「ゴイスてえのは、甲斐ノ国は石和の古語でゴイスよ。ガンスてえのは、^{しもつけ}下野ノ国は足尾の古語で
ガンスよ」

オ「何が何やら訳が分からなくなってきた。ところで、神奈川からここまでズ～ト歩いて来なさった
か。一体何日くれえ掛かったかネ？」

ワ「オジサン、冗談言うもんでネエよ。東海道だけでも五十三次というではネエか。その先京都から
この徳島県までは更に半月も掛かるスヨ。アッシは天狗に乗って飛んで来たので、たった2時間
で来たヨ」

オ「ハハア、左様か。マ、気を付けて行きなされ。大瀧寺は、その上だよ。もうすぐだナ」

ワ「そうですか、では後30分も歩けば御の字ですネ」



オ「左様、車で3時間くれえだナ」
ワ「ギャッ、・・・」

工事のオジサンが車で3時間程と言った大瀧寺への道は、ここから徒歩で1時間ほどだった。香川県から徳島県に5分ほど入った所に赤いトタン屋根の小さな御堂がポツンと建っていた。お寺の伽藍はこの小さな本堂しかなかった。納経所も本堂の裏手の物置のような所であった。人は誰も居らず、大声で呼んだら小屋のような庫裏からオバサンが現れた。何とも鄙びて淋しい山寺だった。



(淋しい山寺、別格 20 番「大瀧寺」)

参詣する人も無いのか、ローソク立てにも線香立てにも一本のローソクも線香も供えられていなかった。寺伝によれば、この寺は由緒ある寺で、奈良時代に行基菩薩が塩江より登って阿讃山脈秀峰に一寺を建立し阿弥三尊を安置されたのがこの寺の開基であるという。八十八札所の大窪寺とも縁が深く、昔は東の大窪寺・西の大瀧寺と並び称されたそう。また、寺の由緒書によれば、空海がその自伝「三教指帰」で求聞持法^{さんごうしき}という修行を行ったという^{くだり}の“・・・阿国大滝^{のぼ}嶽に躋り攀じ、土州室戸崎に勤念す。谷響きを惜しまず、明星来影す・・・”の中の大滝嶽はこの寺であるという。

(*註) 求聞持法

求聞持法とは、虚空蔵菩薩の真言「おん ばさら あらたんのう そわか」を百万遍唱えることによって、記憶力抜群の超能力を得る方法である。この真言は短いものであるが、口に出してゆっくり唱えれば1回唱えるのに5秒程掛かる。この計算でいけば、1日に1万回唱え続けても(毎日14時間)100日間かかる計算になる。宗教学者五来重氏によれば、人間魚雷「回天」の特攻隊員として九死に一生を得た哲学者上山春平が実際にこの求聞持法をやってみたところ、何もしないでこの真言だけを唱え続けることは非常に退屈な苦行だそうで、その退屈を紛らわすために行道をしたり火を焚いたりしながら真言を唱えるのだそう。そういえば、求聞持法の修業は行道と聖火のセットになっているのは、実はこのような俗な理由からであったのかも知れない。余談であるが、百万回という大きな数をどのようにして数えたのであろうか？ 数珠の108珠を動かすことによって108回は数えられる。小さい石ころを100個持っていて、数珠を1回廻し終える度に石を一つずつ捨てて行けば、石が全部無くなれば1万8百回となる。これを百日繰り返せば百八万回となる。百日を数えるには、少し大きめの石ころを100個並べておいて、1日毎に捨てて行けばよいという計算になるが、果たして根が続くかどうか・・・。

三教指帰に書かれているこの“大滝嶽”は、八十八札所の第21番太龍寺(阿波)でも、この件は当寺のことであると言っており宗教学者の五来重氏も同調しているが、果たしてどちらが本物であろうか。遍路の粗と言われている衛門三郎の伝説(その6、P.58参照)と同様、このような伝承はどの寺でも欲しいものであろう。

こちらの別格20番の大瀧寺の御本尊は仏様ではなく権現である。この寺の境内には西照神社^{にしてる}という御宮があり、この神社は厄除けや縁結びの御利益があるとかで参詣者も多いらしい。そこの祭神が西照大権現であり、この大瀧寺の御本尊も同じ西照大権現を祀っている。昔の神仏習合の名残であろう。従って、御真言も他の寺院と異なり「南無西照大権現」という安直(他言すれば“簡単明瞭”)ともいえ

る) なものであった。権現というのは、仏や菩薩が衆生済度のために神様の姿に化けてこの世に顕現された仮の姿である。これを本地垂迹という。

マ、理屈はともかく、かつてはこの西照神社も併せた別当格の大寺であったのであろう。「四国八十八ヶ所総奥之院」の石碑が泣かせる。



帰途、岡山で途中下車して、この春に 24 時間に及ぶ開頭手術から回復した大学時代の悪友モリヤーノ、同じく 1 ヶ月程前に 7 時間の心臓手術を受けて元気になった堀君の 3 人で岡山の呑み屋で全快祝をし、翌日は兵庫県西宮に途中下車して潔っちちゃんと一献、その翌日は山の会・シリウスの 11 周年記念登山で奥三河に泊まって鳳来寺山の鳳来寺に参詣した。鳳来寺は真言宗の寺で、断崖絶壁の諸処に四国八十八霊場のミニ版が作られていて、そこも急ぎ足で巡礼したので、これで四国八十八ヶ所を 3 回巡ったことになるが、その験は全く顕れなかった。因果応報、六道の闇、嗚呼。

(その 7 了)

(「四国遍路 野宿ノ記」 完)

「四国遍路野宿ノ記」目次に戻るには、画面最上段最左端の戻るボタン  で戻って下さい